

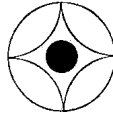
現代日本文學大系

79

高 雄 高 集
小 田 切 秀 雄
五 謙 人
秋 野 正
多 野 正
本 平 荒



筑 摩 書 房



現代日本文學大系 79

昭和四十七年六月二十日
昭和四十八年九月十五日

初版第一刷発行
初版第二刷発行

本多秋五 埴谷雄高
平野謙 小田切秀雄
荒正人 集

著者 本多秋五 埴谷雄高
平野謙 小田切秀雄

発行者 井上達三

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一―二二三

印刷 株式会社 精興社 製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0395 (製品) 10079 (出版社) 4604

目次

巻頭写真
筆蹟

私小説の二律背反	一三
小林多喜二論	一四
佐多稲子論	一五

本多秋五集

荒正人集

自由と必然との戦	三	第二の青春	一五
芸術・歴史・人間	三	火—原子核エネルギー—	一六
『白樺』派の文学	三	大人国・小人国	一四
物語戦後文学史(抄)	五	二つの町	二〇

平野謙集

負け犬(アンダ・ドッグ)	二七
夏目漱石の文学	三四

島崎藤村

ヴァイキング的精神	二五〇
-----------	-----

埴谷雄高集

虚 空	二五
意 識	二七
闇のなかの黒い馬	二六
変 幻	二六
神の白い顔	二五
夢について	二七
可能性の作家	二五
観念の自己増殖	二二
還元的リアリズム	二七
歴史のかたちについて	二五

小田切秀雄集

北村透谷論	三三
新文学創造の主体	三三
小林多喜二問題	三三
小林秀雄と斎藤茂吉	二六
頽廢の根源について	二七
転向と世代の問題	二四
人間の信賴について	二五
文学の立場と政治の立場	二九

〔付録〕

「近代文学」創刊まで	埴谷雄高	四九
「近代文学」同人雜記	同 人	四四

「近代文学」終刊に際して

荒 正人 四六

年譜

四三

著作目録

四九

本多秋五集

わたの原八十島かけてこぎ出でぬと

人にはほつげよ
延虫のつり舟

小野篁王の歌一首
日暮途遠の感と託す

一九七二年五月

秋
五

自由と必然との戦

トルストイのポロジノ史詩はきわめて愛国的なものである。

さきにトルストイは、ブルトウースクの役について、「われわれ文官は、戦争の勝敗を批判するのに悪い習慣をもっている。即ち、戦争の後に退いたものは敗北者にほかならない——と、こういう風にわれわれはいうのだ。」(第五編第九節)とピリーピンに書かせていた。ポロジノにおいては、フランス軍の死傷二万八千に対して、ロシア軍の死傷五万といわれ、戦後ロシア軍は陣地を維持しえずして退却した。常識からいえば、ポロジノ会戦は当然にロシア軍の敗北といふべき戦いであった。トルストイ自身も別のところでは、「フランス軍はモスクワ付近において勝利を博した」(第一四編第一節)と書いている。そう書かざるをえないような戦いであった。にもかかわらず、トルストイはそれをロシア軍の勝利だとして宣言する。

八月二十六日の夕方、ナポレオンは、フランス軍をラエフスキー砲台およびポロジノ村から後退させ、翌日の午近くになって、はじめて軍を前進せしめた。それは、二六日夜において、翌朝ロシア軍の攻撃のあるべきことを彼が期待していたこと、翌朝になって、前夜中にロシア軍が退却したのを発見して、はじめて前進を命じたことを証している。即ち、ナポレオンはロシア軍の退却を知るまで、自軍の勝利を信じていなかったことを証している、といわれる。だが、そういうことはおそらく戦いの常であって、その一事をもつて、ロシア軍の勝利を立証することはできない。戦わんとする意志の喪失こそ、真の敗北だといえるだろう。そして、ポロジノ会戦ののち、たしかにロシア軍はま

だ戦意を失っていなかった。だが、その時、フランス軍もまた戦意を失ってはいなかったのである。フランス軍の戦意喪失を、モスクワ炎上以前に見ようとするのは、何としても不当である。だとすれば、ポロジノの戦いを、ロシア軍の勝利と宣言することは無理である。にもかかわらず、トルストイは、「敵にわれの精神的優越を示し、自己の無力を認めしめる精神的勝利を、ロシア軍はポロジノにおいて贏ちえた」と断言する。

ナポレオンがはじめた敗北者心理を味わされているのも、その愛国的見地のなせる業なら、クトウゾフが戦いなかばに「戦争は味方の勝利」と断定し、「明日はこちらから攻撃だとふれてこい」と命じる場面が、そういうナポレオンの描写と対照的に描かれているのもまた、その愛国的見地の現われに相違ない。とはいえ、トルストイのポロジノ史詩における愛国的性質をいう場合、それらはむしろ第二義的三義的なものにすぎない。

スモレンスク陥落の日、絶望した市民は自分たちの家に放火する。アンドレイはそれを見ながら一言の制止もしない。駆けつけてきたペルクは、「眼の前で放火が行われているというのに、一体なんということです。後で責任を問われますぞ！」と譴責する。アンドレイはこのドイツ人を、じろりと見やうて返事もしない。

ポロジノの前日、バルクレーを評してアンドレイがいう。「いまの場合、あの男が駄目なのは、……なんといったらいいのかな……そうだ、君のお父さんがドイツ人の侍僕を使っているでしょう。立派な侍僕で、君よりもかえってよくお父さんの用を便じる。だからその男に任せといたらいいのだ。けれども、もしお父さんが瀕死の病気に罹られたら、君はその侍僕を追っ払って、自分の不馴れな不器用な手で、お父さんの看護をするにちがいない。それが器用な他人よりも、かえってお父さんを落着かせることになるんだ。ロシアが健全な間は、他人だって用を便じることができる。立派な大臣にもなれるだろう。しかし、いったん緩急ある場合には身内の者が必要なんだ。」

聰明なバルクレーは、戦況を綜合して敗北と判断した。使者は報告をクトゥーゾフにもたらず。クトゥーゾフは使者を叱咤する。「バルクレー將軍に、わしがそういったといい給え。あの人の報告は間違っている、明日は必ず敵を攻撃するのだとな。」バルクレーに復命した使者は再び駈け戻って来ていう。元帥の命令を「書面で確証していたきたい」というのがバルクレー將軍の希望である、と。

これら外人蔑視の裏面にひそむ強烈な国粹主義さえも、トルストイの眞の愛國的感情をいうとき、なお副産物的なものに思える。

ボルコンスキー老公爵は、ナポレオン軍接近のため、ルイスイエ・ゴールイからの立退きを余儀なくされ、侵略者の蹄の音に脅かされながら病床に横たわっている。彼は、そのうえに自分の一切の誇りと信頼が築かれていた祖国の凌辱を瀕死の床の上で経験させられる。彼の眼からは涙が止めどなく流れ出る。「ロシヤは滅びた！滅ぼされてしまったのだ！」彼の死が悲劇的であればあるほど、愛國的効果は強められる。彼の死の悲劇的な描写の中に、作者の愛國的情熱が脈々っているのである。

フランス軍に捕えられたラヴルシカは、摺れつからしの下男根性から、相手をナポレオンと知りながら、「旦那がたの方に、ナポレオンがいるってことは、わっし共もよく存じておりますよ。あの人は世界中を平らげました。」などとおべっかを使う。しかし、そういう言葉の下から、「だが、ロシヤはまた別ですからね。」といい放つ。名もなき一従卒さえも、「自分ながら合点のゆかぬ」愛國的言辭を本能的に口走るのである。そういうところにまた、作者の愛國的感情が看取される。

だが、それら愛國的色彩の自然に滲む描写さえ、トルストイの眞の愛國的感情からいえば、むしろなおその灌溉する流域にすぎないのであって、愛國心の源泉はさらに奥深いところにあると考えられる。かりにいま、トルストイの愛國心が、それらの地帯に源泉するものとしたら、スロボードスキー宮殿の感激に犠牲を申し出たモスクワ貴

族たちが、翌日「自分で自分のしたことに驚いた」と書いたり、ペテルブルグには、モスクワの感激を「おそろしく皮肉に巧妙に冷笑する」サークルがあったと書いたりすることなど、一体何と解釈すべきだろう？百姓たちがひそかにフランス軍と連絡をとり、地主の命を拒むボグチャエロヴォ村の「一揆」を描き、女中たちが令嬢のいつけをきかなくなるモスクワの「謀叛」に言及し、「明日はおれも殺されるのだ。それもフランス人の手にかかるのではなく、味方に殺されるかもしれないのだ。現に昨日もひとりの兵隊が、おれの耳の傍で鉄砲の引金をおとしたからな。」というアンドレイの想像を描いたりすることなどは、トルストイの愛國史観と一体どう関係するといふべきだろう？

ボルコンスキー老公爵は、いまわの際になつてはじめて、この剛直な性格に独特の羞恥心を振り切つて、令嬢に対する内心の愛情を吐露する。「始終思つていた、お前のことばかり、……思つていた！」馬鹿で、無細工な奴め、としかいわなかつた娘に、「あの白い服を着なさい。わしはあれが好きだ。」と弱る声でいう。はじめて父の眞情にふれたマリヤは、溢れ出る愛情のやり場に苦しむ。そのマリヤが、父の遺骸に接すると、忽ち嫌悪と恐怖に突きのけられる。この場合、前後の關係からいって、それは効果の統一を妨げているにすぎない。にもかかわらず、トルストイがそこをそう書いているのは、それがいちばん眞実だと思われたからに違いない。愛國史観に逆流する側面を、あえてトルストイが書いているのも、眞実だから仕方がない、という理由からであつたに相違ない。

トルストイの愛國心は、思想とか觀念とかいうようなものを、乗りこえたところに発している。思想や、觀念や、すべて意識的なもの以前において、トルストイは既に充分に愛國心的であり、純粹に眞実だけを追求することで、彼は完全に愛國心的になるのである。トルストイにとっては、「祖国を荒廃せしめんとして進みつつある敵」についての詔勅が読み上げられ、感激に声をくもらせたロストフ伯が、「いや、

まったくそうだ！」というとき、そこに自然に、「お父さまはなんていい人でしょ！」と飛びついて行くナターシャが想像され、砲弾が落下し、味方が潰走する、抛棄直前のスモレンスクの街には、髪の毛を引きむしりながら、「さあ、みんな持って行ってくれ、畜生めらの手に入らないようにな！」と叫ぶフェラポントフの姿が、何の作爲もなく想像されたのである。

侍女のフランス娘のブリエヌが、現住所に止まる住民には保護を与える旨をしるしたフランス軍司令官の布告もたらす。村内不穩のおり、この將軍に保護を頼むのがいばんでしよう、と彼女はマリヤにすすめる。父の死に思い砕かれ、世事一切を抛擲していたマリヤが、忽ちキツとなる。「誰からこれを貰いました？」誰の立退き勧告にも耳をかさなかったマリヤが、咄嗟に立退きを決意する。「公爵ニコライ・アンドレーヴィッチ・ボルコンスキーの娘が、ラモワ將軍に保護を願ひ出て、その恩恵を受けるなんて！」自分は構わない、しかし自分は亡父および家兄アンドレイの代表者なのだ、自分が汚名を蒙るまゝいと配意は一族としての義務なのだ、と本能的に感じるマリヤの思考は何と自然なことか。

スモレンスクから退却の途中、アンドレイは空家になったルイスイエ・ゴールの邸を見廻る。いつも洗濯女のお喋りで賑わっていた邸の近くの池には、岸をはなれた踏台が横向きに浮かんでいる。人氣のない邸に一人留守をまもる老執事は、若旦那の不意の来訪を迎えて、われ人ともに置かれた境遇の激変に今更のように感動し、感動のあまりオロオロとあらぬ指図を習慣的に仰ぐ。荒廃したルイスイエ・ゴールの庭には、マッチ一擦りで敵への憎悪となつて燃え上る敗戦の悲哀がどんなに深く漂っていることか。あくまでリアルにと追求してゆくことで、トルストイはますます純粹に愛国的になつているのである。一八〇五年には、ブラウナウの郊外で「プロシヤの奴が一揆を起したので、オーストリア人がそいつを取っために行つてゐるんだ。」とか、その方が片づいたら「ブナバルト」との戦争も始まるのだ、とかいっ

ていた兵卒たちが、「國中揃つて押し出そうとしている」といい、「そんな時じゃない」とウォートカを飲まなくなる。ポグチャイロヴォ村の隠棲時代に、ボナバルトがスモレンスクまで押し寄せてきて、たとえルイスイエ・ゴールを脅かすようなことになろうとも、僕はけつして二度と現役の軍隊に勤めまい、といつていたアンドレイが、「明日の戦いには勝つてみせる、どうあつても勝つてみせる！」「彼等は僕の考えによるとことごとく犯罪者だ。」という。かつては、「僕の意見では、永久平和も不可能じゃありません。ただし政治的権力の平均を手段とするんじゃないありません。」と称していたピエール、現に今も平和的手段による理想社会の実現を目的とするフリーメソンの一員であるピエールが、点火の期待に膨れあがる「愛国心の潜熱」を了解する。

ここに溢流する驚くべき愛国的熱情というものは、日露戦争のとき、當時は無抵抗主義の宣伝者であつた老トルストイをして、「ロシヤが敗れたときと、侮辱を感じる。」と洩らさしめた、あの本能的好戰的愛国心に通じている。ヤースナヤ・ポリャーナの庭で、彼の発した叫び声で驚が舞い去つたとき、「叫ぶことはなかつた！」と口惜しげに呟いた、そのとき彼の同情は、狙われた雛の方にでなく、空しく獲物を逸した鶯の方にあつた、とゴリキイは書いていゝ。鼻のつけ根に棍棒の一撃をくらわせ、その狼の断末魔に「快感」を感じているトルストイの「残忍性」を、ロマン・ロランは指摘していた。トーマス・マンは、コーカサスの血氣旺盛な士官時代、トルストイが「身も心も軍人」だつた側面を描いている。たしかに、トルストイはそういう人間性情の濃厚な男ではあつた。

とはいへ、一八一二年役の物語を、一八〇五年役の物語と対照するとき、そこに、この戦役の国民戦争としての特質の打ち出されている事実を見逃せない。「戦争と平和」着手に先立つ数年前、トルストイはヤースナヤ・ポリャーナ学校の「歴史の第二課」で、一八一二年役を講じた。そして、その愛国的なボロジノ戦史は、学童たちに異常な

熱狂的感激をもって迎えられた。そういう事実と、『戦争と平和』におけるポロジノ会戦の愛国的描写との間には、冥々の因果関係のありべきことを、トーマス・マンが指示したのはおそらく正しい。その場合、トルストイが、学童たちの異常な熱狂的感激を、愛国的ポロジノ戦史に対する、子弟を通じての民衆の批准と受け取り、それゆえにそれを尊重したたろうことは疑えない。

ルソーは、結婚は配偶者との契約であるばかりでなく、「自然」との契約でもあるといった。その「自然」を、善意はもとより、悪意をもってしても人間のいかんともなしえない、非情で、必然的で、客観的なあるものとすれば、その意味での「自然」と、それに対する「人間」との戦いが、ポロジノに戦われている。ポロジノの戦野には、ロシア軍とフランス軍との決戦が行われているばかりでなく、「自然」と「人間」との決戦が戦われている。

スモレンスクからの退却途中、真夏の池端にアンドレイが一瞬襲われた無気味な戦慄は、その戦いの予感ではなかったろうか？ *chance of death*。そこには絶対永遠を求める精神と、あまりに現実的な現実との対照がある。それはまた「人間」と「自然」との対立でもあったのではないか？

「死を踏して戦う価値のあるこんどの戦争」において、目的は無条件的である。無条件的な目的は無条件的に手段を聖化するだろう。「明日の戦いにはどうあっても勝ってみせる！……彼等は僕の敵だ。彼等はことごとく犯罪者だ。チモシーヒンも軍隊全部もみんなそう考えている。」非常事態には非常律が君臨しなければならぬ。「捕虜にしないで殺してしまうのだ。」「より多く兇暴に戦い、より多く自己を惜しまないものが勝利をうる」のだ。しかし、戦争はあまりに醜悪であり、あまりに敵愾である。非常律による夥多の裁断は何によって永遠に通じるのか？「神様は天国からどんな気持で彼等を見、彼等の祈りを聞いていられることだろう？ なあ君、僕は近頃つくづく生きるのが辛

いのだ。僕はあまりに多くのものを理解するようになったのだ。」現実の悪の吹き分けがたさがアンドレイを悶絶させようとする。アンドレイを悶絶させようとするものは、悪を悪とする「人間」内具の性情と、その悪をしも必然とする非人間的な「自然」との相剋対立なのであるまいか？ その間に調和の橋の架けがたさ——その調和の橋の架けがたさの必然の「理解」——それが「つくづく辛い」のではないか？

ポロジノ会戦の前夜、ナポレオンは例によって、「簡潔にして雄勁」な勅諭を発して将兵を激励した。しかし、ナポレオン麾下の将兵がポロジノに死闘したのは、ナポレオンの激励によってではなかった。軍全体——破れた服を身にまとい、行軍に疲れ、餓えきっていたフランス人や、イタリヤ人や、ドイツ人や、ポーランド人の群れは、モスクワへの彼等の道をさえぎる軍隊を見出したとき、「酒が封を切られた以上、のまないわけにゆかない」と感じたのである。そのとき、「もしナポレオンが戦うことを禁じたら、彼等はナポレオンを殺してもロシア軍と戦ったに相違ない」のである。

ナポレオンの作戦命令は、「どれ一つとして実現しうるものもなければ、事実また実現されもしなかった。」ロシア軍の砲兵陣地に榴霰弾を雨注すべし、と作戦命令に命ぜられていた砲は、到底そこまで弾丸がとどかなかつた。左翼を迂回せよ、と命じられていた部隊は、途中で進路を遮断されてしまった。第一の堡塁を占領すべし、と命じられていた部隊は撃退され、橋梁を渡るべし、と命じられていた部隊は河のこちら側で撃退されてしまったのだ。

作戦命令には、「かくて戦闘開始後、敵の行動に応じて臨機命令を発すべし。」と書かれてあった。しかし、その臨機の命令とても、何一つ実行されはしなかった。実行されるわけがなかった。ナポレオンのもとへもたらされた報告が、みな間違っていたからである。戦闘中、何がどうなっているかを正確にいうことが、誰にもほとんど不可能だったためであり、副官たちが多くは自身で見ず、人の報告をそのまま

伝えたからであり、最善の場合でも、副官が一里の道を駆けている間に、戦況が変化してしまつたからであつた。コロチヤ河の橋梁がフランス軍の手に落ちたと報告された時、現場では、橋はロシア軍によつて奪還され焼却されていた。突角堡への突撃は撃退されたと報じられたとき、突角堡はもう部隊によつて占領されていた。戦死と報ぜられたダヴーは、実は軽傷を負つたにすぎなかつた。ナポレオンはこうした「必然的な虚偽の報告」にもとづいて、さまざまの指令を發した。それゆゑ彼の命令は実行されるはずがなかつたのだ。

ナポレオンの元帥たちや將軍たちは、いちいちナポレオンに諮らないうで独断によつて命令を發した。しかし、彼等の命令も、「実行されることは極めて稀で、しかも微々たる程度にすぎなかつた。」戦鬪中の兵士を實際に動かしたのは、下級の指揮官たちであつた。ナポレオンは勿論、ネイやダヴーやミュラーにさえ彼等は諮らなかつた。彼等は命令を遵守しなかつたり、勝手な処置をしたりして、後で責任を問われるのを恐れなかつた。なぜなら、「戦争の眞の最中には、人間にとつて最も貴重なもの——自分自身の生命が問題」だつたからである。「生命の安全は、時には退却に存し、時には前進に存した。したがつて、激烈な戦鬪の熱火の中にある人々は、その瞬間の心持次第で行動」せざるをえなかつたのである。

ナポレオンが自己の功業と偉力の源泉と恃んだ彼の「精神力」はもろくも敗れた。ナポレオンは、「自分がこの事件に深く關係があると承認しながら、それを阻止することができなかつた」ばかりか、心中ひたすら休息と平安と自由を望んでいたにもかかわらず、彼は何ものかによつて「もっと食わしてやれ！」と叫ばされたのであつた。しかし、軍隊は、彼自身を超えたナポレオンを超え、その軍隊自身を軍隊がまた超えたのであつた。「そうだ、……もしおれが生きていたとすれば、これこそおれのために残された唯一のものだ。けれども今ではもう遅い。おれにはちゃんと解つている！」とアンドレイは考えた。「同胞と愛するものに対する憐愍と愛、敵に対する愛」は、「人間の意

志ではなく、人間と世界とを支配するものの意志」によつて圧倒されたのであつた。

数百門の砲は火を吐いて爛れ、幾万の人馬は弾雨の中を駆けめぐる。ヴォルテージは次第に高まり、灼熱した装置は白光を放つて慄える。明日はどうあつても勝つてみせる、彼等はことごとく犯罪者だ、と叫んだアンドレイが、万人に対する愛と憐愍を覚える。今はそんな時ではない、とウォートカを却けた兵士等の間にも、生きとし生けるものの哀れが眼醒めはじめ。湧き騰り捲き返す大浪の間に人間精神の基底がちらつく。しかし、人間らしい世界を押し、人間どもが何を考えようと、何を希求しようと、それ自らの運行をいささかも変更しない、巨大なあるものが無気味な姿を現わす。

アウステルリッツの「高い空」、スモレンスク街道の白い肉身の幻影、クニャジコーヴォ村での「僕は近頃生きるのがつくづく辛い！」に潜在していた二力の対立は、ここボロジノの最後にいたつて、アンドレイの「愛」と、しよほ雨の薄暮に砲弾をとばす「意志」とに分離し、絶対の対照をつくり出している。同胞と愛するものと敵とに対する「愛」は、人間と世界とを支配する巨大な「意志」の前に、颯風に捲かれる木の葉にひとしいではないか？「人間」は「自然」の大海に漂う藻草の一すじにすぎないではないか？ 神来に乗じたトルストイが、幾百万の觀念と形象をわけて想像の六合を駆けめぐり、最後の涯に見出したものはかかる光景である。

人間の意志計画にかかわりなく、それ自身の鉄の歩みをつづけるもの、人間の意志の「自由」を踏みしだき、それ自身の不断の進展をつづける盲目の車輪、それをもし「必然」と名づけるなら、ボロジノの戦いは「自然」と「人間」の戦いであるばかりでなく、「必然」と「自由」の戦いでもあるのである。

戦いである人生において、戦争は煙の中の焰、焰の中の火花である。人生が必然の悪なら、戦争は必然の悪の煮えたぎる坩堝である。そこでは不可思議な偶然の球はもつとも軽く飛ぶ。戦争に魅せられる男ト

ルストイは、必然の悪の坩堝として——偶然の球がもつとも軽く舞い交う中に「必然」が「自由」を滅ぼす現実の精髄として——飽かず戦争に眺め入る。「自由」は噉り泣くアンドレイの中に氣息奄々としてゐる。ポロジノのしょぼ雨に飛び交う砲弾に「必然」の至廠の響きがきこえる。

「偽りの謙遜をぬきにすれば、これは『イーリアス』のようなものだ。」とトルストイはいった。『戦争と平和』について、作者自身の口からこういう言葉をきくことは、人々を驚かせ、かついくらか当惑させた。しかし、『戦争と平和』が近代の『イーリアス』であることを否みうるものは誰もなかった。

『戦争と平和』執筆の約一〇年前——一八五七年八月に、トルストイは『イーリアス』と『福音書』を多大の興味をもって読み、『イーリアス』の想像できないほど美しい終りの部分を読み上げた。」と日記に書いた。そして、『福音書』と『イーリアス』と、これら両書の主題の間に、一致の見出しがたいに苦しんだトルストイは、「どうしてホメロスは善即ち愛ということを知りえなかつただろう？」と自問し、「啓示だ、それ以上の説明はない。」と自答した。

この場合、「善」は、より多く美や力を意味する異教的な善をさし、「愛」は、キリスト教的な愛を意味していたにちがいない。でなければ対立がない。「啓示だ」云々の意味はよく解らない。しかし、「どうしてホメロスは善即ち愛ということを知りえなかつただろう？」という場合、トルストイが「愛」——即ち、『福音書』の倫理的立場に重心を置いていたことは明らかである。

ところで、ポロジノ史詩の最後の部分は、まさに『イーリアス』のその「想像できないほど美しい終りの部分」を彷彿させる。トロイアの城壁の上では、老王プリアモスは「双手をあげて頭うち」、王妃は「右手に胸をかき開き、左に乳房引き出し」、アキリュウスに立ち向かうとするわが子ヘクトールを、口々に制止している。ヘクトールはき

かず、大敵に向つて挑戦する。ヘクトールを斃したアキリュウスは、老父老母の眼下で屍体を凌辱する。

その踵より踝に左右の足に孔穿ち、

ここに牛皮の強き紐貫き通し、其の端を

兵車に繋ぎ、頭をば無慚に地上引きずらせ、

輝く武具を積み入れて、かくて車台の上に乗じ、

鞭を当れば揚々と飛ぶが如くに両馬馳す。

屍体曳かるる地上より斯くてうずまく砂煙

黒髪乱れ、先までは美麗の頭、塵埃に

まみれ汚れぬ、クロイニオン斯く讐敵に、ヘクトールを、

彼の祖先の郷の上、辱しむるを許容しぬ。

惨虐眼を覆わしめる光景である。しかも、神はそれを「許容」したのである。アキリュウスはなおも飽かず、パトロクロスの墓をめぐつて三度屍体を凌辱する。

アキリュウスはいかにも非道に見える。しかし、パトロクロスの死をきくときの青山も泣き枯らさんばかりの号泣、葬儀後も輾転夜も眠らぬ亡友への哀慕の情からすれば、彼には彼の理由があるのである。

プリアモスは、暮夜ひそかにアキリュウスの陣を訪い、ヘクトールの遺骸を乞う。「神明をかしこめ、われに憐みを垂れよ、汝の父思え、われはもつとも不幸の身、地上に住める何人も、享けざる非運われは享け、愛児屠れる敵の手に、わが唇を触れんとす。」とかき口説かれ、流石のアキリュウスも、

蓋し神明かくの如、苦難の生を送るべく、

われら不幸の人間に命ぜり、神は愁なし。

と泣く。各人が自己の必然を深く辿って、盲目の力の支配する世界へ出る。ポロジノの最後にトルストイの見出したものも、この「愁なき神」の世界にほかならない。

『戦争と平和』には、その模型図ともいふべき作品がある。短篇『リュツェルン』がそれである。『リュツェルン』の主人公ネフリュー

ドフ公爵は、旅の歌うたいに不当な待遇をあたえた男達——一人のイギリス紳士とホテルのボーイ——に赫怒し、「文明」の虚偽に対して義憤を感じる。しかし、そこから彼はまた倫理的判断というものについて考へる。

「積極的解決の要求を持ちながら、永久に動揺する善と悪、事実、考量、矛盾などの果て知らぬ大洋へ投げ込まれた人間は、不幸な憐れむべき動物である！ 人々は一方の側へ善を、いま一方の側へ悪を押しやるために、数世紀の間もがき苦しんでいる。世紀は世紀について流れて去るが、公平無私な頭腦の所有者が、どこで何を善悪の秤の皿に投じて、秤はびくとも動かない。そして、どちらの側にも同一量の善と悪とが見出されるだろう。もし人間があまりに決定的な判断や思索をしないように、また永久に疑問として残さんがためにのみ発せられるような疑問に答えないという習慣を養成したらどうだろう！ あらゆる思想は虚偽でもあれば公正でもあるということを理解しえたならばどうだろう！」

そこから彼は独特の困難な弁証をたどる。

「それらが虚偽だというのは、真理のぜんたいを把握しえない人間の一面を指したもので、それらが公正だというのは、人間の努力の一面を表現するためである。人々はこの永久に動揺し、無限に相錯する、果てしない善悪の混乱に勝手な分類をほどこし、その大洋の中に仮想の境界線を引きながら、そのとおりに海が自然と分割されるのを待っている。彼等はぜんぜん違った観点から、ぜんぜん違った平面の上に引かれた数百万の分類が、他にも存在することを知らないかのようにある。もっとも——新しい分類は数世紀の間に完成されるには違ひなからうが、すでに多くの世紀は過ぎ去ったし、これから後も数百万の世紀が過ぎ去ることだろう。」

そこから彼の新しい懷疑が始まる。

「曰く文明は善であり、野蛮は悪である、自由は善であり、束縛は悪である——こうした仮想の知識が、人間の本性に賦与されている本能

的な、幸福きわまりない、原始的な善の要求を殲滅しつくしたのである。自由とは何ぞや？ 専制主義とは何ぞや？ 文明とは何ぞや？

これらの疑問に対して誰が定義を下しうるだろう？ 一つのものを他のものと区別する境界は一体どこに存在するか？ 動揺し混乱する紛々たる事実を測定しうる善悪の標準を、心中確然と所有している人が果して誰かあるだろうか？ ありとあらゆる事実を抱擁し、それらごとごとく量定しうるほど偉大な知力をもった人が果してあるだろうか？ 善悪が同時に混淆してはいないような状態を見たものが果して誰かあるだろうか？」

しかし、彼はまたそこから考え直す。

「たとえ唯の一瞬間でも、まったく理知的に人生から分離して、何もの支配をも受けず、上からその人生を見下しうるものが果して誰かあるだろうか？ 一人ある、ただ一人だけある。それは絶対不可侵なわれわれの指導者である。われわれを総体としても、個々の単位としても、洩れなく洞観し、必要な事物に向って突進する要求を各人に賦与した宇宙的精霊である。木には太陽に向って伸びることを命じ、花には秋になって種を投げることを命じ、われわれには無意識に相倚ることを命ずるその精霊である。」

かくて「宇宙的精霊」の支持によって倫理的判断が再興される。

「この絶対不可侵にして善良なる一つの声が、慌しく騒がしい文化の進展を圧して響いている。誰がより多く人間で、誰がより多く野蛮人なのだろうか？ 歌うたいのみすばらしい服装を見て憤然と食卓を去り、彼の労に対しておのれの財産の百万分の一を与えようとせず、しかも今は飽満した体を明るく居心地のいい一室に落着けながら、悠然と支那の時局を論じ、そこで行われる殺戮を正義と見なしているイギリスの貴族であろうか？ それとも監獄に投ぜられる危険を冒しながらポケットに一フランの金をひそめて、二十年間何人にも危害を加えることなく山々谷々を遍歴しつつ、今日も自分を侮辱してほとんど外へ突き出さんばかりにした人間をおのれの歌によって慰めたのち、飢

えと疲れと恥辱を忍びながら、どこかの腐った藁の上へ寝に行つたかの小さな歌うたいであろうか？」

だが、いかな苛立ちも弾劾も、歟なみ一つ残さず呑み込んでしまふ「文明」の大海をあまりにもよく知るネフリユードフは、出けら同然の自分にだけ虚偽と見え矛盾と見えるものも、神の眼には調和ありとせられるのであろう、という諦念にやがてみちびかれる。

「いや……自分はあの男を憐んだり、イギリス貴族の独善的境遇を憤慨する権利をもつていないのだ。……これらすべての矛盾を許容し、それに存在を命じた神の恩恵と叡知は無限である。ただ神の法則と意図とをうかがおうとして大胆無法な努力をしている無力な虫けらにもひとしい自分だけに、それが矛盾と感ぜられるのだ。神は輝かしい量り知られぬ高みからつつましく見おろしながら、人間一同が無限に矛盾だらけな行動をしている、その果てしない大調和を喜びをもつて眺めているのだ。自分は傲慢な考えのために全体の法則から脱出しようとして企てたが——駄目だ、自分もボーイたちに対する卑小な忿懣によって、永久無限な調和の要求に呼応したにすぎないのだ……」

短篇『リュツェルン』は、主題において『戦争と平和』に通じているばかりでなく、『戦争と平和』の主要な弁証法も、萌芽的にはすべてそこに蔵されているといえる。『リュツェルン』の終りに現われる「大調和」の神は、『イーリアス』における「愁いなき神」に外ならぬ。このような「大調和」の神によって、すべての矛盾を肯定しようとする『イーリアス』一系の作品『リュツェルン』が、一八五七年七月（発表は九月）——即ち、『福音書』的倫理の立場から、「どうしてホメロスは善即ち愛ということを知りえなかつただろう？」と訝かつたその前月——に書かれているというのはまことに興味深い。

結末において悪を許容する立場を示している『リュツェルン』が、その心なくして読めば、道義的憤激の書と読まれやすく書かれている。「どうしてホメロスは善即ち愛ということを知りえなかつただろう？」と書くトルストイが、同時に、『イーリアス』の「想像できないほど

美しい終りの部分」に魅了されている。そこにもトルストイにおける『イーリアス』的立場と、『福音書』的立場の対立を見ることが出来る。「幸福も善行も容易に実現されるばかりでなく、その一つを措いては他が成立しない——美も幸福も善行も結局同一物である。……どうして僕はこれを悟ることができなかったんだらう？」（『青年時代』二、春）と書いて以来、芸術と宗教の対立、生活と信仰の対立に悩んだ晩年にいたるまで、トルストイは終世、盲目の必然を許容する『イーリアス』の神と、愛と献身を唱道する『福音書』の神との、満足な調和には到達しえなかつた。しかし、『戦争と平和』において、トルストイは少くとも一〇年懸案の問題に対して、最深最大の展開を試み、独自の解決を与えようとしているのである。

『リュツェルン』における「大調和」の神の出現は、きわめて発作的ないしは突発的なものであり、トルストイの思想体系にとって間歇的なものであった。それは一月後には否定されねばならぬようなものであった。この種の観念は、『ホルストメール』等の作品に隠見してゐるとはいへ、『戦争と平和』にいたるまでは潜在的なものに止まっていた。『進歩と教養の定義』その他の教育論文においては、トルストイは『リュツェルン』のネフリユードフに毫もゆずらぬ道義的憤激を「文明」にむかつて浴びせている。『戦争と平和』においても、「愁いなき神」の観念は、ボロジノにいたるまで見え隠れに潜流するにとどまっていた。

アウステルリッツにおける、歴史的事件は世界史なる時計盤上の指針の動きにすぎぬという思想の断片、アレクサンドル皇帝の乗馬の「心理描写」などに、その片鱗がうかがわれる。しかし、それらは後続の見られぬ突然変異的出現に終っていた。マリヤの宗教心や、ピエールの神秘主義にも、「大調和」大肯定の神の観念は、可能としてひそめられていたとはいえる。しかし、ボロジノ以前においては、「不幸は神様がお下しになるもので、人間の業ではありません。」というマリヤの忠言は、「男は忘れたりすべきものでもなければ、またそん

なことができるものでもない。」とアンドレイに却けられ、ビエールはフリーメエソンに対していつも疑わしげな態度で臨んでいた。駈落ち事件の後、心の貧しさを知ったナターシャは、「不可解ながら偉大なあるものに対する忍従の念」を味わった。しかし、健康の回復とともに、いつの間にか彼女はそうした気持を忘れてしまう。盲目の力に対する帰服の情は、そうした形で予感としては揺曳しているけれども、ポロジノ以前においては、それは遂に従属的な地位を脱しなかつたのである。

第九編に入って、それは宿命論の「理論」として表明されている。しかし、それはまだ「理論」として天降りに表明されているにすぎない。ポロジノの終りにいたって、はじめてそれが真に優位を宣するにいたっている。小説を通じてする現実探求の結果、いいうべくんば思わず知らずトルストイはそこへ出たのである。そこでトルストイは「愛」に対する「意志」の、「人間」に対する「自然」の、「自由」に對する「必然」の優越をまざまざと見たのである。そこに『イーリアス』の神と『福音書』の神との対立は、『イーリアス』の神、つまり「愁いなき神」の支配の側において解決されたのである。

ひと昔前、トルストイは、「思想が確信となるためには、常に一種特別の経路を経なければならぬ。大抵の場合、それは意想外な形式をとるもので、たとえ同一の確信に到達するのでも、ほかの人間の辿る道とはまるで違っている。」(『少年時代』)と書いた。まさにそのことがここに生じたのである。宿命の「思想」が、ここにはじめて宿命の「確信」となったのである。現実探求の際涯において、「愛」の一葉舟が「意志」の濁波に浮沈するのを見る世界へ、思わずもトルストイは出たのである。その世界を完全に自己の所有として領略するために、なおいくらかの時間を要するだろう。しかし、「思想」が「確信」に変わる一線は、まさにここに劃されているのである。

ショーペンハウエルは、彼のいわゆる「意志」の使役を離脱したと

ころに純粹な認識主体が現われ、その純粹な認識主体——いわゆる「世界眼」——によって芸術が生れるという。カントの無関心性を想起させるその芸術論のうえに立って、彼が「世界眼」の説明に際して過去の追想を挙げていけるのは興味ふかい。「この場合、われわれの空想力がよび返してくれるものは、単なる客観——単なる事物や事件のみで、当時における意志の主体としてのわれわれ自身ではない。……こうした場合、空想力がわれわれによび起してくれるものは、『個人的主観的なもの』ではなく、『単なる客観的なもの』であり、したがって、われわれは恰かもそれらの客観的なものが、『意志』に對するなんらの関係もなしに、純然たる客観として存在していたかのように想像する。」と彼はいう。この議論は、とつてもって歴史文学の一根拠ともされそうである。カタルシスの意味をもつ『戦争と平和』——とくにポロジノ会戦の部分には、ショーペンハウエルの歴史文学觀に照応するところが多い。

ポロジノのしよほ雨の中に砲弾をとばす「意志」は、個人的主観的なものを駆使するショーペンハウエルの「意志」を想像させる。ところで、その「意志」の駆動を瞭然と認識するものは、もはやそれの使役を脱した主体である。この「世界眼」による認識には、どこやら虚無主義的なものが感ぜられなくはない。しかし、もし叙事詩の精神というものを、普遍性ある人間の情熱が、運命によって没落に際会する光景を、大規模に、かつさながらに正視するところにあるものとするれば、ポロジノの史詩の「想像できないほど美しい終りの部分」には、『イーリアス』のそれに通じる叙事詩的精神の君臨が見られる。「愁いなき神」の世界の出現によって、歴史の遠近が見渡され、現実の真相は白日の下に歴々として照らし出される。

ポクロフスキーによれば、女中と結婚するために妻を監禁し、息子を殺し、梅毒で死んだビョートル一世以来、ロマノフ家の歴史は罪惡の歴史であり、アレクサンドルは子殺し(ビョートル一世)と夫殺し(エカチエリーナ二世)の後をついで玉座に登った親殺しであった。